

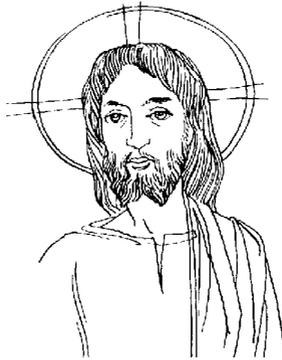
2020年3月8日

創世記12:1-8

ローマ書4:1-5、13-17

ヨハネ3:1-17

**新たに生まれなければ、  
神の国を見ることができない**



日本聖公会東京教区  
東京聖三一教会

2020年3月8日

東京聖三一教会

創世記12:1-8

ローマ書4:1-5、13-17

ヨハネ3:1-17

## 新たに生まれなければ、 神の国を見ることができない

コロナウイルスが広がりを見せ多くの方々が苦しまれ、教会の礼拝も中止を余儀なくされる厳しい状況です。多くの方々が、この前代未聞の事態にどうしたら良いのか分からず、戸惑っています。政府も混乱の中にあります。一日も早くコロナウイルスが終息するようにと祈りながら、お話を伝えたいと思います。

最近多くの人々がアルベール・カミュの小説『ペスト』を読んでいるそうです。これは、コロナウイルスの流行の苦境の乗り越えるためだけではなく、このことをきっかけにさらに成熟した人生への道を求めるという意味合いもあるでしょう。この小説は、今日の聖書日課のみ言葉とも繋がっているので、まず小説のあらすじをご紹介します。

小説の舞台はアルジェリアの海辺の都市オラン市というところですが、人々が穏やかに暮らすこの都市に驚愕の出来事が生じました。ペスト感染症が猛威を振るい、多くの人々が死んでいったのです。人々はこのような過酷な状況にどう対処すべきか戸惑いました。市役所は厳しい措置を取り、都市を封鎖し出入り禁止としました。人々は孤立し、恐

ろしさのなかで、落ち込んでもいました。このような苦境の中にあつては自分のことだけを考える人も多かったのですが、一方で自分の身を惜しまずペストを乗り越えるために努力する人も現れました。そして、隣人を助けようとする人々の努力によって、ペストはおさまり、人々は日常生活に戻り、小説は終わります。

残酷な現実と死の前でも希望を失わず、絶望に立ち向かうことこそが意味ある人生であるということ、この小説から学ぶことができます。そして悲劇的な運命の中に閉じ込められながら暮らす人々の間にも、何より連帯意識が大切であることが強調されています。

小説の登場人物の中でも、とりわけ他人のために献身している人がいます。

まず医師のベルナル・リウーです。彼はこの感染症がペストであると知り、その危険性も見抜いていました。彼の妻は市外で療養中でした。妻のことはとても心配でした。しかし、多くの人々が危険にさらされていることを考えると、自分の妻のことだけを考えることはできませんでした。彼は封鎖されている市から脱出することを諦め、ペストと戦いました。彼は善きサマリア人に他ならないのでした。神学者のカール・ラーナー(Karl Rahner)は、このような人を「無名のキリスト者」と言いました。

もう一人は新聞記者のレイモン・ランベールです。彼はこの都市に立ち寄っただけであると言って、なんとかして封鎖されている市から脱出することばかり考えていました。パリに彼の恋人が待っていました。しかし、他人のために献身する人々の姿を見て感動します。その後、脱出をあきらめ、ペストと闘いました。この姿は悔い改めて、生まれ変わりの人生を生きる人と言えます。

ところで皮肉なことにこの二人は信仰を持っていません。このような

ことから、この小説は信仰を持たない人によって、キリスト教の信仰を批判する根拠として使われることもあります。批判の主な対象は「パヌルー神父」です。パヌルー神父は、ペストが流行りだすと、それが不信仰者に対する神様の罰であると言いました。そして不信仰者を叱責しました。しかしペストが不信仰者に対する罰であるという考えは間違っています。残念ながら 21 世紀にもこのような中世紀の信仰を持っている人たちがいます。感染症は神様によるものでもなく、罰でもありません。ですから、感染症は罪人と義人とを区別しません。パヌルー神父は、罪のない子どもさえペストによって死んでいく現実と、医師のベルナール・リウーの批判を通して、自分の考えが間違っていることに気づきました。そしてペストとの闘いに積極的に協力しながら患者たちのために献身しました。

ところでこの小説では信仰者と信仰を持たない人の間に考え方の違いが目立っているところがあります。それは、信仰を持たない人々は、「人間は意志と能力を通してあらゆる災厄と難さを乗り越えることができる」と考える、ということです。そして、人間の努力と能力ではなく、神様に頼っている信仰者を愚かな人であると判断することです。もちろん、人間の努力と意志と能力はとても大事なことです。そして感染症は信仰によって治ることはありません。科学と医療の助けが必要です。しかし、感染症が解決されたとしても、すべての問題が解決されるわけではありません。依然として人間には感染症以外の、多くの問題が残っているからです。また、感染症も人間の努力、科学の発達によって完全に解決できるものではありません。感染症は絶えず新しい姿で発生しています。近年でも新型インフルエンザ、マーズ、サーズなどの感染症が発生していることから分かります。先端科学と医療はその後を追い

かけているだけです。

私は、作家のアルベール・カミュも理性と人間の能力を大切に思いながらも、人間と科学の限界も知っていたのだと思います。そのためこの小説は、ペストとの闘いが終わったのは住民の努力の結果というよりは、自然現象のように突然潮が引いていく様子として描かれています。そして最後に医師のベルナル・リウーはこのように告白します。

「ペスト菌は決して死んでしまうわけではありません。… いつかまた襲ってきます。… ですから、なるべく心を緩めてはいけません。」

私は、この表現は人間の限界を知り、傲慢ではなく謙遜であるべきである、という旨を伝えるものであると思います。この謙遜とは、人間に起こるすべてのことを理性と科学によって解決できると信じる傲慢からの謙遜です。この小説が書かれた1940年代の人々は理性と科学の発達にうっとりするほど心を奪われ、「不可能なことがない」と確信していました。理性を通して全てのことが理解でき、科学を通して全ての問題が解決できると思っていました。しかし、理性と科学が発達しても解決できないことや理解できないことは依然として残っています。新しい問題も起き続けています。いくら科学が発達しても解決できない領域があることを認めて、受け入れることが、信仰者の人生の重要な徳目です。矛盾と不条理を解決していく意志ある姿も人間的ですが、矛盾した現実と不条理を受け入れ、神様の前に謙虚に生きていくのも人間の姿であるということです。

今日ご一緒に読んだ創世記には、神様がアブラハムに「カナンのに旅立ちなさい」とおっしゃるみ言葉が紹介されています。アブラハムは当惑したはずで、自分が暮らしてきた都会であるハランを離れ、馴染みのない異邦人の地で牧畜生活をしながら生きていかなければ

ならないというのは、とんでもないことでした。それは不条理でした。しかし、アブラハムはそのみ言葉に従いました。これは、「分かりにくく、受け入れ難いことでも、喜んで従えば恵みになることもある」ということを知らせてくれます。それだけでなく祝福もあります。それは、皆さんがよくご存じの子孫と土地についての祝福であり、アブラハムが「祝福の源となる」ということです。

今日ご一緒に読んだ福音書には、イエス様とニコデモの対話が紹介されています。ニコデモは真の信仰者への道を追い求めていました。イエス様を訪ねてきたニコデモにイエス様はこのようにおっしゃいました。

「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることができない。」(ヨハネ 3:3)

新たに生まれるためには、自分に馴染みのないこと、理解できないことを受け入れなければなりません。新たに生まれるというのは、受け入れにくい現実を通して悟る信仰的な成熟であり、悔い改めとも言えます。先にご紹介させていただいたパヌルー神父が、最初はペスト感染症が神様の罰であると思っていたのに、医師のベルナル・リウーの指摘によって誤りに気づき、連帯と協力を通して新たに生まれ変わる姿でもあります。パヌルー神父はその後、献身的に隣人と助けあいました。人は誰でも間違っただけで判断することもあります。しかし、悔い改め、過ちを正し、神様の意志に従おうと努力すれば、恵みの人生を生きることが出来ます。

最近私たちが直面している現実はとても厳しいものです。けれども信仰者は、この脅かされるような現状が、ただ恐ろしいというだけではなく、信仰的な省察と成熟のきっかけにもなりうるということを記憶しなければ

ばなりません。冷静に現実を受け入れ、現実を通して現れる神様のメッセージを深く考えてみる必要もあります。そして共に祈りながら、知恵を集めて協力しましょう。そうすれば、きっと神様もこの困難を乗り越えていけるように助けてくださるでしょう。

この一週、皆さんと皆さんの家庭に神様の限りない慈しみとみ守りがいつもありますようにお祈りいたします。